

学生のドキュメンタリー制作による学び

2015年・2016年の実践から

徳 永 博 充

1. はじめに

大学における私のほぼ唯一の関心は学生たちの成長です。教員となって7年。今、やっと仕事への自信が芽生えてきたと感じています。その核となるのが学生たちと共に行う「ジャーナリズムの実践」、とりわけ「ドキュメンタリー映画の制作」です。ここに記すのはその「教育実践記録」ですが、言葉を換えるなら「ドキュメンタリー制作による学生と筆者自身の学びと成長の軌跡」でもあります。まず、教育実践の選択が何ゆえにドキュメンタリー制作なのかについてふれます。

『『女たちの』戦争にはそれなりの色、臭いがあり、光があり、気持ちが入っていた。そこには英雄もなく信じがたいような手柄もない。人間を越えてしまうようなスケールの事に関わっている人々がいるだけ』

「心の中を覗いて、その人自身の言葉を聞きとる。……大きな内容を秘めたちっぽけな人たちを探している。虐げられ、踏みつけにされ、侮辱された人たち」

(スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ「戦争は女の顔をしていない」
執筆日誌¹⁾)

「戦争は女の顔をしていない」。「ボタン穴から見た戦争」。「アフガン帰

還兵の証言」。「チェルノブイリの祈り」。ノーベル文学賞作家スヴェトラナ・アレクシエーヴィチは、「小さき者」の声を紡いで「大きな物語」を描く表現手法をとります。これらの作品は彼女が40年かけて聞きとりを行った、子供から90歳近いお年寄りまであわせて数千人のインタビューを基に構成されています。その手法は文学というよりはルポルタージュそのものであり、仮に映像を伴うならまさにドキュメンタリー映画と言えます。そこでは膨大な事実を掘り起こし、不断の抽象化の過程を経て、一つの伝えるべき価値のある真実を導き出す作業が行われます。「戦争は女の顔をしていない」は、男性兵士の不足からナチスドイツとの戦いに赴いた、女性兵士たちの証言を編みあげた作品です。彼らは看護婦や通信員としてだけでなく、兵士として武器をとって戦いました。しかし戦後は「男性兵士と行動を共にした」と世間から白い目で見られ、みずからの戦争体験をひた隠しにしなければいけませんでした。スベトラナは500人以上の元従軍女性に寄り添い、時間をかけて聞き取りをおこなっています。こうした女性たちが語る戦争は決して英雄的なものではなく、寒く、汚く、飢えていた日常でした。残酷な死に自らの手を染める現実でもありました。それは男性たちが語る戦争に比べて、遥かに現実味を帯びて読み手に迫ってきます。

学生のドキュメンタリー制作においては、彼女のような作品を要求する訳ではありません。しかし、学生たちがそれを目指すことによる学びは計り知れないと考えます。なぜなら彼女の創作の過程で必要な精神作業は、その質の違いがあるとしても学生たちも同じように経験することになるからです。それは四つの過程で試され、批判に耐えうるか鍛えられることになります。1)「テーマを選ぶ視点」。すなわち社会の様々な事象の何処に着目し、アジェンダとして何を表現できるかを考える洞察力。つぎに2)「問題の背景を認識し、個別の対象を探す力」。これはテーマとなる事象の背景を調査して理解し、誰の何を描くかを見極める作業です。さらには3)「対象者に寄り添う力」。ドキュメンタリーは「今を生きる人間の葛藤」に

迫り、そこから「現実の社会が抱える矛盾」という普遍の伝える価値を抽出するものです。そのためには取材対象者に共感し、その人生の一部を共に生きる覚悟が必要です。最後は4)「公正に、誠実に事実と向き合い、謙虚に真実を表現する力」です。ドキュメンタリーとは伝えるのではなく描くものです。よってそこには作者の思想や哲学が滲み出ます。しかし、作者は決して声高に演説をしたりはしません。ただ集めた事実を物語らせるのです。そうして多くの人を知るべき真実を表現します。これら四つの過程はいずれもジャーナリストが日常的に行っている精神作業です。

こうした過程を踏む「ドキュメンタリー制作」を、筆者が明確に学生たちの学びの中心の一つに据えたのは、2015年からのことでした。さらにドキュメンタリー制作の学びを、自分なりに体系化する試みを行うのは、この教育実践記録の執筆が初めてのことです。放送記者としての経験から、社会的課題を映像作品として表現すること自体、個人の成長に極めて有効であることについては確信を抱いていました。しかし、2014年以前までは筆者自身が放送記者として行ってきたことを、求められた大学教育のカリキュラムにあてはめた、まさにOJTの延長として捉えていたのが実態です。ただその中においても、如何にすれば学生たちのより深い学びに結びつくか。あるいは社会性を身につける一助となるかについて、教員として誠実に悩み試行錯誤を行ってきたつもりです。結果、学生たちが社会に関心を広げ、達成感を感じて成長する姿を目撃しました。一方で、対象者とのコミュニケーションを億劫がったり、継続してやり遂げることができなかつたりで、中途半端のままで終える学生がいたのも事実です。本稿では成功体験だけではなく中途半端に終わった例も記し、教育方法の改善を考える基礎とします。

その効用と必要性が、教育現場においてかまびすしく言われてきた手前、アクティブ・ラーニングの視点からも「ドキュメンタリー制作」を見て行く必要があると考えます。筆者は報道の仕事をした放送人を経て、幸運にも教育に携わる機会を得ました。しかし教育については素人であり、まし

て教育論の知見となると恥ずかしい限りです。しかしながら「ドキュメンタリー制作」を学びの中心とする教育を行う教員は数少ない点において、この機会を利用した筆者の内省は記録として意味のあることかとも考えます。筆者が知る限りにおいてこうした教育を行っているのは、上智大学と法政大学で教える水島宏明教授。中央大学の松野良一教授。そして関西大学の里見繁教授。武蔵大学の永田浩三教授。あとは北星大学放送研究会ジャーナリズムチーム。東京大学大学院情報学環教育部メディア・ジャーナリズム論実験実習班といったところです。

教育論は門外漢と言っておきながら、そもそも論を述べるのは不遜なことでしょう。ただ報道現場に身を置き行政の有り様を取材してきた筆者にとっては、政府・省庁レベルから半ば強制力を伴って、細かな規定が行われることには違和感を覚えるものでした。まして、「主体的学び」の涵養を目的とするアクティブ・ラーニングにおいてはなおさらです。しかしながらその嚆矢を確認することは必要です。2012年、中央教育審議会は次のように答申を行っています。

「従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要」

(2012年8月中央教育審議会答申²⁾)

これが肝であるとするなら前述した四つの過程を見れば判るように、ドキュメンタリー制作はまさに理想的なアクティブ・ラーニングであることがわかります。なぜなら四つの過程は全て学生同士、あるいは教員との絶え間ない検討と議論を伴って進められるからです。

2. 到達点として

ドキュメンタリー作品「忘れられた魂～宮島の原爆死者たち」(22分)の、最初のバージョンが完成したのが2016年6月末でした。その前後から始まり、翌2017年2月中旬の二つ目のコンクール受賞までの間、学生たちは作品のブラッシュアップに加えて表彰式への出席やマスコミ取材の対応に追われ、経験のない高揚感を味わうことになりました。

以下は番組企画書の中の「制作意図」及び、「作品概要」です。この企画書は最終版で、番組撮影前に書いたものとは、かけ離れた内容になりました。ドキュメンタリー作品を学生たちに制作させる上で、「何を表現するか」を問い続けることは、重要な教育的要素となります。調べて書き、取材して修正し、さらに作品が完成してからも書き直しを行います。常に学生たちには点検を求めます。映像作品を完成させることと同様に、企画書の作成は作品が問うもの、すなわち「作品が訴える普遍の価値」を考える上で重要な機会となります。

番組企画書「忘れられた魂～宮島の原爆死者たち～」

(* Youtube <https://youtu.be/kShZcjsIy1w>)³⁾

(制作意図)

原爆ドームと宮島。広島には二つの世界遺産があります。広島市の中心部からおよそ15km。広島湾に浮かぶ宮島は、美しい自然と神社仏閣が調和する人気の高い観光地です。一見、原爆とは無縁に見えるこの宮島ですが、原爆投下のその日から多くの被爆者が運び込まれました。島内にある七つの寺に収容されましたが、そのほとんどが亡くなりました。しかし詳しい調査は行われず、被爆から70年経った今日、この事実を知る人は稀です。誰が島に辿りつき、どんな思いで逝ったのか、どこにどう葬られたのか。その実相を明らかにするために、私たちはお寺を訊ね目撃者を捜しま

した。忘れられた原爆被害を掘り起こします。

(作品概要)

被爆70周年の2015年7月から、1年間かけて調査、取材、撮影を行いました。町の世話役の話から辿り、一人また一人と当時を知る証言者を掘り起こしました。宮島小学校の教員だった新田久子さんは、イワシのように焼かれて横たわる母子の姿を覚えています。虫の息だった母親が赤ん坊の口に乳房を含ませていました。小学3年生だった佐伯弘登さんは、死者を運ぶ木箱の隙間から女性の黒髪がはみ出した光景を忘れることはできません。宮島に運ばれた被爆者数は、一説には350人ほど。我々の調査によってさらにおよそ100人がいたことがわかりました。そのほとんどが亡くなったとみられます。しかし、正確な犠牲者の数はわかっていません。わかっていることは死者全てが宮島の対岸に運ばれ、焼かれたり埋められたりしたことです。ただ、どこの誰だったのか。どんな夢を抱きいかなる絶望のはてに亡くなったのか。判ったことは、原爆は人が存在した記憶すら残さないという事実です。

2-1 「地方の時代」映像祭コンクール入賞

2016年11月。関西大学で開かれた第36回「地方の時代映像祭2016」において、この作品が「市民・学生・自治体部門」で奨励賞を受賞しました。「地方の時代映像祭」は現在日本では、最も権威あるドキュメンタリー・コンクールの一つであり、学生が参加できるものとしては最難関とされています。「放送局部門」、「ケーブル部門」、「市民・学生・自治体部門」、「高校生（中学生）部門」の4カテゴリーがあり、地域の文化や課題、時代をとらえた映像作品を対象としています。これまでに累計5,149作品が出品された実績を誇っています。

2016年度の応募は合計325作品と過去最高を記録。「市民・学生・自治体部門」にも、前年を20作品上回る106と、コンクール史上最も多くの作品

が出品されました。その中から9作品が入賞し、当該作品は奨励賞を受賞しました。受賞作品のうち学生が制作したものは以下の7作品です。

- 1) 「母が語る～阪神淡路大震災から20年～」関西大学社会学部里見ゼミ
- 2) 「和枝バラ～隠された悲劇～」法政大学水島宏明ゼミ 高瀬智基
- 3) 「夜、学ぶ人たち～尼崎市立・琴城夜間中学校2015～」関西大学ジャーナリズム実習
- 4) 「元特高志願兵の証言」中央大学FLP松野良一ゼミナール 名越大耕
- 5) 「埋もれた時限爆弾～さいたま・アスベスト被害～」武蔵大学永田ゼミ & 練馬・文化の会
- 6) 「霞ヶ丘団地 最後の一年」東京大学大学院情報学環教育部・メディアジャーナリズム論 実験実習D班
- 7) 「忘れられた魂～宮島の原爆死者たち～」広島経済大学メディアビジネス学科 徳永博充ゼミナール

(第36回「地方の時代」映像祭2016 記録から)⁴⁾



写真1) 「地方の時代」映像祭2016 写真2) 受賞した徳永ゼミ生たち

2016年11月12日と13日の両日。関西大学で開催された表彰式には、この番組の制作に参加した6人の学生が出席しました。小林俊介くん(当時4年生)が代表して壇上に登り、賞状、トロフィー、賞金を受け取りました。このほか映画祭ではシンポジウムや受賞作品を上映して議論を行うワークショップ、学生たちが著名な映像作家やジャーナリスト等と交流を行う

パーティーが開かれました。当学から参加した学生たちは晴れの場に臨み、知的刺激の渦に巻き込まれて、達成感と高揚感を味わったのは言うまでもありません。他の大学の学生たちとの交流は、作品の到達点と制作者としての考察の深さを比較対照する、またとない機会になりました。以下は小林君の授賞式の挨拶と、映像祭のブックレットに寄稿したコメントの抜粋です。

「映像祭でこのような光栄な賞を頂いて大変幸せに感じています。生涯の宝です。感謝いたします。一年間の取材を経て完成した作品では、知られていなかった宮島の負の歴史を掘り起こすことができました。一方で私たちには後悔もあります。それは多くの宮島の原爆死者たちの一人一人の物語を紡ぐことができなかつたことです。小さな物語の数々を描いてこそ、初めて見える戦争の真実があるはずだからです。しかし、原爆が持つ残酷な一面は表現できたかと思っています。原爆は人の命だけでなくその人の人生、夢、死に様すべて。すなわち存在した記憶さえも消し去ってしまうということです」⁴⁾。

今回受賞した他大学の学生はいずれもジャーナリズムを専攻するか、あるいはドキュメンタリー制作を掲げて運営するゼミナールやコースに所属する者たちです。その意味において筆者のゼミ生が制作した作品がそれらに肩を並べて評価されたことは、特筆すべきことであると考えています。学生たちの最初の受け止めは、「関西大学、中央大学、東京大学といった有名大学と同列に評価された」という驚きでした。しかし、他大学の作品を視聴し、多くの学生と語り合うことによって、自分たちが成し遂げたことへの誇りと自信を得たことは間違いありません。

地方の時代映像祭コンクールには、近年、多くの大学が挑戦を行っています。ただし、受賞する大学は法政大学、中央大学、武蔵大学、東京大学といった首都圏の大学か、立命館大学や関西大学といった関西の大学に集

中してきました。「地方の時代」と名がつけられた映像祭でありながら、大学生による出品は中央に偏しています。わずかに北海道の北星学園大学が地方大学として名を連ねてきました。その意味において今回、広島経済大学の学生が受賞した意味は大きいと考えられます。



写真3) 挨拶する小林俊介君



写真4) 受賞の喜び

2-2 マスメディア等の評価とTVF 東京ビデオフェスティバル・アワード受賞

学生たちがドキュメンタリー制作によって達成感を抱く機会としては、外部評価が重要となりました。前述の「地方の時代賞受賞」に加えて、マスコミ等の報道と番組放送、学内での顕彰、そしてTVF 東京ビデオフェスティバルでの受賞がこれにあたります。マスコミの報道については、大学の入試広報室から多大な尽力を頂きました。メディアビジネス学科のPRにはドキュメンタリー作品の受賞が、好材料になると評価頂いた結果でした。同時に、筆者も前職時代の人脈を通して積極的に広報を行ったところです。これは学生たちのドキュメンタリーが、完成した時点で完結するのではなく、社会性を有する作品として世に問うてこそ意味があると考えられるからです。学生たちには常に、取材者であると同時に表現者であることを求めてきました。よってマスコミによる取材には、積極的に応じるよう指導を行いましたし、彼らも十分にそれに答えてくれました。

マスコミの取材は学生たちの「学ぶ場」, 「考える場」にもなります。



写真5) Jステーションの取材



写真6) 毎日新聞の取材

TVニュースの取材なら、「場面の設定」、「カメラワーク」、「インタビューのポイント」等の考察は、まさに学生たちが行ってきたことであり、プロの取材者のメソッドをつぶさに経験して比較する機会になります。カメラインタビューでは学生たちは、「この作品では何を訴えるのか」という、本質的な問いを必ず投げかけられます。そこでは取材して集めた事実群の抽象化をいかに熟成させるか。まさに彼らの哲学が試されることとなります。またプロが学生たちを取材し制作した企画ニュースを視聴することにより、取材された素材が如何なる視座によってどのように組み合わせられ、何に重きをおいて表現されるかを学ぶことができます。また新聞の取材では、学生たちは記者と対峙する形で能弁に語ることを求められます。2時間、3時間と座談を行うなかで記者から問われるのは、ドキュメンタリー制作に必要な視点そのものです。それは1)「テーマを選ぶ視点」、2)「問題の背景を認識し、個別の対象を探す力」、3)「対象者に寄り添う力」、4)「公正に、誠実に事実と向き合い、謙虚に真実を表現する力」の4つです。形式的な視点や表層的な考察ではなく、学生たちがそれら4点をどこまで深めているかが、丸裸にされる体験を味わいます。学生たちには経験することが極めて稀な、貴重な機会となりました。

以下にマスコミにより取り上げられた機会や、表彰と顕彰の機会を列記します。

(報道)

- ・2016年7月25日 中国新聞朝刊・平和欄
「宮島の『あの日』証言映像に～広経大生 けが人看護 史実に迫る～」
- ・2016年8月4日 広島ホームテレビ「Jステーション」企画ニュース8分枠
「宮島に運ばれた被爆者 大学生が取材 新事実も」
- ・2016年8月13日 広島ホームテレビ「Dr. キャンパ」6分枠
「メディアビジネス学科に密着」ドキュメンタリー制作の様様を中心に放送
- ・2016年9月26日 経済レポート「広経大学生作品が『地方の時代』映像祭入賞」
- ・2016年10月13日 広島経済レポート「宮島の原爆死者」
- ・2016年11月3日 毎日新聞・地方欄
「宮島の原爆死者 知って 広経大生が製作 証言掘り起こす 映像祭奨励賞に～運ばれて亡くなった人々の記録 ドキュメンタリー『忘れられた魂』」
- ・2016年11月28日 中国新聞・地域欄
「宮島の原爆秘話 奨励賞 『地方の時代』映像祭～広経大生 証言掘り起し評価～」
- ・2016年11月30日 朝日新聞・地方欄
「宮島の原爆死者 学生が記録映像に 広島経済大の6人 住民に取材～負傷し船で運ばれた 忘れられた魂～」
- ・2017年2月13日～19日 ちゅピCOM（中国新聞系CATV）番組を放送
広島市，廿日市市，大竹市，尾道市とそれぞれの周辺地域……合計7回
- ・2016年9月8日公開 Youtubeで配信開始
2017年5月20日現在 延べ461回視聴



写真7) 朝日新聞の報道



写真8) 前川学長に受賞の報告

(顕彰および表彰)

- ・2016年11月12日 「地方の時代」映像祭コンクール 奨励賞受賞
- ・2016年11月16日 前川功一学長に学生全員が受賞報告
- ・2016年11月24日 教授会に学生3人が出席し 学長から受賞の紹介を頂く 学生を代表して見附兆治くんがあいさつ
- ・2017年2月12日 TVF 東京ビデオフェスティバル アワード受賞

TVF 東京ビデオフェスティバルは、東京の武蔵大学で公開審査が行われました。学生たちの作品について審査員の一人である映画監督の大林宣彦氏は、「人を見つめようとしている。そしていてねいに描いている」と二点あげて推奨理由を語ってくれました。筆者がお礼を申し上げたところ、「学生たちには表現者を続けなさいと伝えて欲しい」と伝言を託されました。

2-3 学生たちの学び

地方の時代映像祭の受賞式から半月後。ドキュメンタリー制作にかかわった学生たちがどんな思いや考えに至ったのかを、議論の場を設けて語りあいました。以下はその抜粋です。制作にかかわった学生は総勢6人ですが、議論には当初からのメンバーである小林、見附、藤尾、小早川の4

人が参加しました。

《制作スタッフ》

広島経済大学経済学部メディアビジネス学科徳永博充ゼミナール 2016年12月現在

小林俊介（4年）、見附兆治（4年）、藤尾侑里香（4年）

小早川隼人（4年）、奥村達也（4年）、太 麻帆（3年）

《討論会》2016年12月1日 於徳永研究室

以下の討論会の発言はプライバシーを尊重して匿名にします。参加した4人はそれぞれ、以下の制作上の役割を担っていました。

A（撮影，一部編集），B（ディレクター・演出，交渉，調査と一部撮影）

C（サブディレクター，インタビュー，調査），D（調査，朗読）

（今の時点での思い）

A……最初にテーマを出して安易な気持ちで始めた。ただ、作品の出来上がりを見て自分たちはすごいことをやったと再認識することができた。賞も頂いて光栄だなど。自分たちの人生の宝物になりました。

B……取材を通して自分たちも勉強できたし作品も深いものになっていった。それで賞もとれたので満足です。やりきったなと思います。

C……正直ここまでできるとは思っていなかったもので、やればできると自信になった。

D……年末年始にB君と二人で宮島に行った時、まだ構成が考えられなくて行き当たりばったりだった。これは絶対無理やと思ったけれど、最後仲間が編集を頑張った。なんとか形にできて賞をもらったので逆に自分自身は、これくらいで賞をもらっていいのかなと思った。

（制作上の反省）

B……もう少し取材中に疑問を見つけ出すと言う意識が大切だと思った。

ただ話を聴いて「ハイ。そうですね」じゃなくて、話を聴きながらこれはどうなんだという疑問を感じるのが、深い物を作っていくために大切なことなのかなど。疑問を感じたら調べてみようということに繋がるじゃないですか。それで判っていけば自分の知識が増えるし、作品としてもどんどん広がるし深まっていく。

- B……結局、自分たちは宮島の知られていない歴史を掘り起こすということではできたが、一人一人の生きざままでは掘り起こすことができなかったことが心残り。丸山だけである。頑張ればもっとできたと思う。10人、20人は無理としても、2人、3人くらいはできたんじゃないかなと⁵⁾。
- B……取材をしながらどうなっていくのか先が見えなかった。なかなかイメージが湧かなかったから。テーマが重いのでありきたりの結論にはできないと。一方で世話をしてくださった宮島の方から、「あなたたちは結局、どんな作品を作りたいの」と聞かれた時に、答えられなかった。この言葉がぐさっときた。それなのに時間を作ってわざわざ話を聞いてくださるから。申し訳なくて悶々としていた。
- C……事前にもっと調べて学んでいた方がよかった。関係者のところにいった時、戦争の話について答えられなくて、自分たちが挙げたテーマなのに知らないことが多かった。学習していったほうがいいなと気づきました。
- A……事前にきちんとカメラの基本操作や取り方をちゃんと勉強しておけば良かった。あとは他の人が作ったドキュメンタリー作品のカメラワークをしっかりと見て、自分たちのテーマについてどう撮るのかを学ぶ。他のドキュメンタリーなどを見た方がよかった。グランプリ作品を見た時に、戻れるなら自分はあーいうふうに真似して撮ってみたいなと思いました。撮り直すとしたら、先生にショットをけなされたので、逆にギャフンと言わせるような映像を撮りたいなと思う⁶⁾。
- A……取材相手の話に関係する映像を撮り忘れたこと。亀井さんの取材を終わったあとのイメージカットが木漏れ日と家の外観しかなかった。も

う少し意識して撮るべきだったなと思う。亡くなった妹さんの話をしていた訳だから、妹さんの写真を撮影ればよかったと後になって気づきました⁷⁾。

A……後半はディレクターと編集担当に全て任せたので、それはすごく申し訳ないし後悔しています。もし次があるとしたら、ちゃんとディレクターのそばにいて最後まで支えてあげたいと思いますね。

(ドキュメンタリーとは)

B……ドキュメンタリーは人の生き様をとおして、社会のあり方を考えるものだと思います。映像祭ではアスベストについて表現していた学生がいた。それは社会に向き合っていたから。彼らは社会に向けて作ったのだと思う。ディレクターの目線で。

A……時に刻むというか。人生を表現するものもあるし、その時々的事象を掘り下げるドキュメンタリーもある。時に刻むから忘れられない、忘れちゃいけないこともたくさんあるし。刻み込んであるから、絶対、忘れることはない。

D……例えばアスベストならその地域に住んでいる人なら普通のこと、知っていることでも自分たちは知らなかった。自分たちは宮島に住んでいないけれど、宮島の地元の人には原爆のことについて覚えている人がいる。ドキュメンタリーは日本全国に普通にあることを伝える。知ってほしい、知るべきとか知った方がいいよと。作ると言うよりも、ピースを集めていくとか。自分たちでこういうドキュメンタリーを作りたいではなくて、こういうのがある、だからこれを作ろうって。みんなが知るべきことを映像化するというか。伝えるものがあるから作る。

C……ドキュメンタリーは小さい声を拾って届けるもの。普通の民放とかの局だったら大きい声しか取り上げられないとか、多数を取り上げることが多い。しかし少数派の意見を聴かないと、正しいこと、全体を見ることはできないし、小さい声を届けられるのはドキュメンタリー的

なのかなって思う。

(ドキュメンタリーの学び)

- A……映像祭に行った時に「優秀賞」が取れるだろうと漫然とと思っていました。しかし、とれなくて自分たちよりまだ上がいるんだなという、まだ成長できると気づいた。映像に関しては経験もあって傲慢になっていました。しかし撮った画は初心者並で先生に怒られました。
- A……ドキュメンタリーには喜怒哀楽がものすごく出てくる。自分が取材対象者に接して居る時に、彼らは喜んだり笑ったりする。それによって、普段感じているよりももっと深い喜怒哀楽がドキュメンタリーにはある。表面上だけではないものが学べる。ドキュメンタリーで力がつくし、得ることも多い。学びながら、相手と寄り添うことが大切。
- D……一番思うのは記録や本とか文字とかは、思いがわからないというか測りにくい。だから人に実際に会ってみないと、その人の記憶の奥にある思いとか出て来ない。人に会うことがとにかく大切。会わんとだめやなと思う。ドキュメンタリーは直接人と会わないと事實はわからない。これから社会に出て人と付き合っていくうえで、LINEとかそういうのじゃなくて会って話すことが大切だと思う。会えば話す力や聴きだす力が必要だということもあるけれど、まず会ってみることが先決。人と会うことをこれから社会に出て活かせばいい。
- D……自分は野球しかしていない。だからそれ程参加していません。いやー、ほんとうに何も。今まで、特に1年、2年の時には野球を言い訳にして、他のことはあまりしなかった。少しでも協力しなきゃいけないと思えたのは、みんなのおかげかなと思う。
- B……映像祭で上智大学の水島先生が、ドキュメンタリーっていうのは「人と向き合い、社会と向き合うことができる」と言っていました。その通りだなと思います。この制作を通して多くの人に会い、心の奥深くに辛い思いを抱く人とも向き合いました。原爆をテーマに少しだけ社会と向

き合えたかなと感じています。自分はもともと表に立って仕切っていくタイプではないけれど、ドキュメンタリー制作を通して引く張っていくことができたから、就職活動でも自信を持って臨めました。いい経験ができたなと思います。大きな言葉で言うならコミュニケーション能力ですが、人との向き合い方であったり、繋がり方というのを学べたと思う。電話で人と話して通じないことが往々にしてあるが、直接伺って相手と話すことによって判ってくれるし、こっちも相手のことがわかる。そういうのは社会に出ても多分、大切な事だと思う。

B……情熱が大切。いいものを作ろうという意識が作り手になかったら良い物はできない。自分らは1年間と言う長い時間をかけてつくったけれど、いつもモチベーションが高かった訳ではない。気持ちの振れ幅みたいなものがあつた。ある時はめっちゃやる気だったけれど、それがダウンしたりする。それを最後までバーっと持続する人が作れる。継続力というか、粘り強さと言うか。そこで一人でやっているとなえ続けることができない。だからみんなでやって高め合うことが必要。

C……人にわかり易く伝えることを学べた。大人でも自分で判るようにしか話していない人が多いと思う。しかしドキュメンタリーは人に伝えないといけないから、人に判り易く伝えようとする意識をもたなきゃいけないってことを学びました。簡潔に、回りくどくなく。

(自分の将来とどう繋がるか)

B……自分らは結構頑張って苦しんで作った。しかし映像祭で思ったのは、他の大学の学生にはすごい情熱を持ってやっている人たちが多くいんだなってこと。自分たちだけがとっていたので恥ずかしくなった。そして、もっと良い物ができたんじゃないかっていう気持ちになった。受賞者が集まる待合室でいろんな大学の受賞者と話したけれど、将来、テレビ局に進む人や制作会社に進む人がいて、その人たちは将来の仕事につながるということを意識していた。情熱も持続力もきちんと持っている

と感じました。彼らはその作品を本当に良い物にしようと、自分の作品を愛している。自分もそんな思いを持って社会で仕事をしたい。

D……何が大切かと言えばパッションと、やる気と、投げ出さない心。

A……このドキュメンタリーへの愛と、取材対象者にそうしたように人に会いに行く勇気が収穫。じぶんたちのゼミの愛言葉、“It’s a piece of cake!” 楽勝だねっていう気持ちでやりきればいい

C……大切なことは探究心じゃないですか。Bくんも言っていたが疑問を持たないと先に進めないというか、まず自分の課題に気づかない。ドキュメンタリーの制作で学んだように、探究心を持てば社会に出てもどうにかなるんじゃないかと思います。

以上が制作に携わった学生たちの「ふりかえり」の議論です。「今の時点での思い」では、「地方の時代映像祭」の受賞直後でもあり、全員の発言に高揚感と満足感が滲み出ています。つぎに「制作上の反省点」では、ディレクターであり演出担当のBの発言に注目します。制作チームのリーダーである彼に対しては、筆者は終始三つのことを言い続けました。それは「疑問を大切に、事実を掘り下げ続けなさい」。そして「取材対象者とは人生を共にするつもりで、心から寄り添いなさい」。最後に、「何を描くかを考え続けなさい」と。Bの発言には「もっと疑問に忠実だったなら、もっと取材対象者に寄り添えたなら、一人でも多くの『忘れられない魂』を掘り起こせたのではないか」という、後悔に近い思いが伺われます。さらに撮影開始から5カ月を経過した年末年始においてさえ、「何を描くか」を捉えきれていない不安が伺えます。この頃学生たちは、焦燥感の中で模索していました。つまり4つの過程のうち、「テーマを選ぶ視点」と「公正に、誠実に事実と向き合い、謙虚に真実を表現する力」の2点について、まだ十分に考えられていなかったことが判ります。

一方、CとAの反省点は共に、事前の学習が充分ではなかったという点です。Cはインタビュアーであり同時にディレクターBのサブでした。

当然のことですが取材対象者が抱える重い想いをインタビューで引き出すには、対象者の経験的事象（この場合は原爆の被害）だけでなく、彼らが身を置いた時代背景にも思いを致すことが必要でした。言葉を変えるなら「取材対象者の世界観に立つ」ために必要な準備です⁸⁾。インタビューを経験したCの気づきです。Cは対象者の心に入り込む才を持っています。持って生まれた力です。相手に優しく語りかけ、じっくり聴きだすインタビュアーとしての素質があります。その彼女も聴きだすに当たっては、当意即妙の受け答えだけでは限界があると感じたのです。事象の背景を理解してこそ、初めて深く共感できるし、意味のある話を聴きだすことが可能であると体験から学びとったのです。

同様にAは映像を切り取るカメラマンとしての、事前の学びが乏しかったことを悔やんでいます。彼はCATVでカメラ・アシスタントのアルバイトをした経験があることから、当初、自信满满で撮影を行っていました。しかし撮影映像をプレビューしてみると、いくつかの問題点が見つかりました。それは1) 構図を考えずに撮っている 2) 映像がぶれていて安定していない 3) ミドルショットばかりで編集を考えた撮り方をしていなかった 4) 雑感やインサート用の映像がない。いわゆる捨てカットを撮っていない。これらの点を筆者から指摘されたのです。しかしこの時点でAは大いに不服そうに見えました。その後は仲間との制作活動にも消極的になっていきました。しかし、映像祭で優秀な作品を観ることによって、自分の撮影技術の未熟さを改めて認識し、「もっといい画を撮りたい」という積極的な想いに至りました。撮影の基本を学び、ドキュメンタリー作品をしっかりと見ることの重要性を、素直に理解してくれました。しかし、Aがそれ以上に後悔したことは、制作活動の途中から次第に消極的な態度をとっていったということでした。当時は仲間からの呼び掛けにも答えなのまま、撮影や打ち合わせ等に来る回数が減っていきました。本来彼が行うべき役割。映像とインタビューなどの音を文字に起こす作業も人任せでした。そうなった理由は、一つは教員から「考えて撮影することの重要性」

を言われ、自分の撮影技術を否定されたと思ひこんだことです。そしてもう一つは制作チームのリーダーを自負していましたが、次第に仲間の中でリーダーシップが取れなくなったことです。そうした苛立ちが彼の消極性の理由であったと推測しています。

「ドキュメンタリーとは何か」。1年間、意識、無意識の差があるとしても、学生たちはこの難解な命題について向き合ったことがこの議論から伺えます。ドキュメンタリーの理論的指導者とされるポール・ローサーは、「ドキュメンタリーは、アクチュアリティーを想像的に劇化する」と言います⁹⁾。言わば演出論です。筆者が望む学生の学びではありません。ドキュメンタリー制作を通して学生に学んで欲しいのは抽象化。すなわち具体を集めて普遍的価値を抽出する精神作業です。判り易く言うとうこうです。ドキュメンタリーで描くのは「今を生きる人間の葛藤」です。この葛藤に迫り続ける過程で必ず浮き上がってくるものがあります。それが「現代社会が抱える矛盾」です。戦争、公害、教育、暴力、貧困、人間疎外……。こうした矛盾を表出させることで、葛藤が普遍化されるのです。この点で学生たちの意識は、かなりの高みにあります。演出のBは、「人を描くことで社会を描く」と前述の定義と同様に結論づけました。カメラのAは「時に刻む」と独特な表現で、ドキュメンタリーの本質的表現効果を定義しました。Cは「小さい声を拾って届ける」と透徹した想いに達しています。もともと論理的思考を苦手としていた学生が、ドキュメンタリーの制作を行う過程で経験的に学習したことです。それは、本稿冒頭にあげたスベトラナーの哲学に至ったことを物語っています。

3. 「ドキュメンタリー制作」の実践課程

筆者が2010年に当学に奉職して以来、行ってきた映像制作のコースは結果論ですがかなり合理性の高い枠組だと考えています。筆者の学問的関心はジャーナリズムの社会的役割です。そして教育的関心が学生たちの社会的成長です。この二つを結びつけるのが、1年生から始まる映像理論基礎

と映像制作です。そして最終形が3年生からスタートする本格的なドキュメンタリー制作です。ドキュメンタリー作品の制作はジャーナリズムの実践であり、学生の成長を促す能動的なアクティブ・ラーニングと捉えています。

3-1 映像理論からドキュメンタリー制作へ

筆者が教えるメディアビジネス学科には、放送局と見紛うばかりの立派なテレビスタジオや多数のカメラ機材が揃えられています。しかしながらそれらの稼働率は決して高いとは言えません。主たる理由は二つあると考えます。一つはそれらを使って教育を行える教員が少ないこと。二つ目はこうした機材を使った制作の授業は、学生に授業時間外の活動を促すばかりでなく、指導教員に膨大な時間と手間の提供を強いるからです。アクティブ・ラーニングとしてドキュメンタリーの制作は極めて有効です。入学する学生たちのニーズも高いものがあります。しかし、「何か面白い物を作ってみた」だけでは、教育としての効果は期待できません。映像理論と映像リテラシーを学び、その上で社会性を持った成果物を制作、表現していく。手間と暇を掛けた教育が必要です。

(映像メディア論)…1年生前期 座学が中心 以前は必修だが現在は90%の1年生が履修

入学したばかりの1年生を対象に、映像と映像メディアの基礎を学ばせます。制作実習につながる映像理論基礎でもあります。ここでは映画、放送、アニメ、CMなど映像メディアの原理、歴史、効果、流通などについて網羅します。そのうえで映像表現の理論、文法、リテラシー、ジャーナリズムについて、その効果を確認しながら学びます。またスタジオを使った番組制作の実習や、カメラを使った撮影の基礎演習を行います。

(映像制作基礎)…1年生後期 実習 15人定員

ドキュメンタリー制作の初歩です。「人」をテーマに実際に映像作品を

制作します。ドキュメンタリーであって単なる人物紹介ではありません。しかしここでは、社会矛盾を表出させるといった高いレベルのものを要求する訳ではありません。この段階で学生たちに表現を求めるのは、対象者の心に内在する夢、希望、不安、焦燥、恐れといった感情です。筆者はそれを「心の宝物」と形容して、学生たちに「表面上は見えない宝物を掘り当てなさい」と説明します。繰り返し趣旨を説明し、ドキュメンタリーの秀作を見せてイメージさせます。この授業はドキュメンタリー制作において、いかにインタビューが重要であるかを理解させることが目的の一つです。さらに良質なインタビューを録るほぼ唯一の有効な方法、「人と寄り添う」ことを身に着けさせるのが狙いです。しかし、これだけのことであっても昨今の学生たちには難題です。放っておけば特定の人物のレジューメをなぞるだけのような、無味乾燥なインタビューになります。ある程度踏み込むことができたとしても、せいぜい夢や希望といったことであり、不安や恐れといったネガティブな想いまで立ち入ることはまずありません。大学1年生の対人力あるいはコミュニケーション力は、プロのレベルからみるとかなり貧弱です。対象者と何度も会って良好な関係を築いた上で取材を行うということは極めて稀です。彼らの取材に同行することが多いのですが、「初めまして今日は宜しくお願いします。最初の質問です。…………。有難うございました。つづいて二つ目の質問です。…………」。こういった光景をよく目にします。当然のように、対象者には事前に会ってそのバックグラウンドを聞きだし、信頼関係を築いておくよう指導を行います。しかしながらデジタルネイティブの世代である彼らは、そういったアナログ的なアプローチには慣れていません。他人と話すのが億劫と感じることが原因ですが、中には怖いと話す者もいます。

3年から筆者のゼミに入ってドキュメンタリーの制作を行う学生には、1年次にこの授業を取って制作を行う学生が比較的多くいます。受賞した小林俊介君と奥村達也君がこの1年次に制作したのは、「カーリングで人の輪を」という作品です。広島県はカーリング不毛の地でしたが、競技人

口を増やそうと広島市で教えている、ボランティアの一人の男性に焦点をあてた作品です。単に競技者を育てるだけでなく、身障者や子供たちを受け入れて交流する温かなスケートリンクが舞台です。民生委員も務めるこの男性の夢や心情が、陽気な人の輪の中で情感豊かに描かれた秀作でした。何度も通って対象者とも良好な関係を築いた成果でした。見附兆治くんの作品は「故郷に青山あり」というタイトルでした。大学近くの山を地域の人々の憩いの場にしようと、整備を続けるグループのリーダーを描きました。きちんと整えられた広場に秋祭りの笛太鼓が響きわたる、ほのぼのとした作品でした。故郷愛にあふれたリーダーの話が心を打ちました。これら3人は人を描くことによって醸す感動を、この時点で味わったと考えています。

一方、うまくいかないケースも往々にしてあります。それらの多くは指導する教員の話の聞かず、制作の目的を理解しようとしなくて、ただ「カメラを回して自分が面白いと思うものを撮ればいい」と考える学生たちに見られる例です。この授業の最終回では、コメンテーターとしてジャーナリストを呼ぶことにしており、当然のようにそうした学生たちの作品は辛口の評価にさらされることになります。えてしてそうした学生の多くは、その後ドキュメンタリーを含む映像制作から離れていく傾向が顕著です。教育の工夫が必要かもしれません。

(プレゼミ)…2年生後期 2014年までは「デジタルメディア表現」として 2年前期

本ゼミ開始前のお試しゼミの位置づけですが、2014年までは2年生が教員の専門性等を見ながら選択する科目でした。この授業では前任者が放送局出身の技術者で、ドラマやアニメ、可部線各駅の紹介映像など、様々なジャンルの作品を学生たちと制作していました。そこで筆者は、長く親しんだ企画ニュースの制作をテーマに選びました。1年生のドキュメンタリー基礎では、社会性を抜きにして「人」を表現しましたが、ここでは社

会性を明確に打ち出した作品作りを命題としました。「地域を見つめて、アレっという疑問を見つける。それを深く掘り下げて、多くの人々に『こんな問題がありますよ。一緒に考えませんか』と提案する作品」。学生たちにはこう説明しています。ジャーナリズムのアジェンダ・セッティングという役割です。ここでは、社会に問うて議論を起こす内容になるか否かが、評価のポイントとなります。社会が内包する課題を嗅ぎ分け、正確な事実を集めて謙虚に表現することが求められる訳です。1年生の制作に比べるとかなりハードルが高くなります。映像祭で受賞した学生たちや同じ時期にゼミに在籍した者は、ここではこんな作品を制作しています。

「2014年 外国人の眼から見た日本」…奥村達也, 小早川隼人

「交通安全 プロの目線から」…見附兆治, 小川真史

「今時の若者を考える」…小林俊介

「SNS から SOS」…西屋貴博

この他にも以下のような作品がこれまでに制作されました。

2016年…「再生へ 土砂災害の街から」, 「写真が繋ぐ ファンとカーブのかけ橋」

2015年…「地域が見守る子供の安全 安佐南区祇園学区の場合」

「マイナンバーとは何か その功罪を考える」

2014年…「地域に大学を持つ意味」と上記4作品

2013年…「妙案はあるか 待ったなしの待機児童問題」, 「大学生 ころの相談室」, 「ゴミのポイ捨てをなくすために」, 「若者の本離れ」

2012年…「通学路は安全か 祇園小学校区にみる」, 「原発とヒロシマ」

「若者と農業 安佐南区の実情」

2011年…「安佐南区の待機児童問題」, 「川の事故から子供を守れ」

2010年…「横断歩道は必要か」, 「危険な道路事情」

ドキュメンタリーが人を見つめ、そして社会を見つめるものであるという前提に立つ時、1年生の「ドキュメンタリー基礎」と2年生の「企画ニュース」への挑戦が、そのまま3年次からの本格ドキュメンタリー制作の基礎となる訳です。

3-2 「忘れられた魂」の制作過程

放送局でドキュメンタリーを手掛けてきた筆者にとって、学生たちに作品を制作させる際にまず頭に浮かんだことは、果たして彼らが投げ出さずに最後までやりきれるかということでした。放送局において新人記者がドキュメンタリーを1本制作するには、ゆるぎない覚悟と不断の努力が必要です。それは視聴者が簡単に想像できるレベルではありません。同僚、先輩、上司、カメラマン、編集マン、そしてライバルでもある同業者と最後には視聴者。それら全ての批判に耐えうる作品を目指さなければいけないからです。その重圧は、常人なら逃げ出したくなる程です。ただ学生たちには、プロや視聴者からの厳しい眼差しが向けられる訳ではありません。かといって批判に耐えない作品でお茶を濁すことは、学生たちのためにもならないことです。学生たちにどこまで要求するか。かつて放送局で部下を指導したように、完全を目指して厳しく指導するか。あるいは学生の社会的成長が目的であるから多少の事には目をつむって全て自主性に任せるか。学生たちがドキュメンタリー制作に取り組んだ1年間は、教員である筆者自身の迷いと揺らぎの1年間でもありました。振り返ります。

3-2-1 撮影開始までの意識づけ

2015年春に筆者のゼミに参加した学生は合計9人でした。彼らには4月の新学期開始直後から、「被爆70周年」のこの機会にドキュメンタリー作品を作ってみないかと、意識づけを行いました。そして8月6日がそのピークであるとも伝えました。誰を取材し何をテーマにするかを定めるため、マスメディアに目を通すこと。被爆者団体や被爆証言者の会などに実際にリサーチを行うようアドバイスを行いました。しかしゼミ運営に関する

る話し合い、前期のテーマである放送ジャーナリズムに関する研究に時間を取られ、ドキュメンタリーについて学び始めたのは5月下旬からでした。以下はドキュメンタリーに関するゼミでの考察の経過です。

(ゼミでの考察)

- 6回目のゼミ（5月27日）……教科書「放送を学ぶ人のために」の中の「放送番組論・ドキュメンタリー」の項から議論。ドキュメンタリーの定義、表現方法の特徴。人を描くことの大切さなどについて理解を深めた。また、筆者が放送局在職時代に制作したドキュメンタリー、「カリブの風に吹かれて 忘れられた日本人たち」を視聴し、テーマ設定、取材準備、取材の基本、表現の特徴などを話し合った。
- 7回目のゼミ（6月3日）……1年次からの制作経験者を割り振る形で、制作グループをA、Bの2班に分けた。上智大学水島宏明教授のSTV時代の作品「母さんが死んだ」を視聴。取材者の着眼、視座、継続力、普遍的な価値などについて議論を行った。
- 8回目のゼミ（6月10日）以降は、毎回のゼミで調査の進行状況やテーマ出しについて、両グループから報告を行わせた。
- 10回目（6月24日）……ドキュメンタリー取材の際に重要な事実の確認の仕方や具象と抽象の関係性について考えた。カットを積み重ねてシーンを作り、シーンが集まってストーリーが出来上がるという考え方について、筆者がかつて取材した「沖縄のヒバクシャ」の企画ニュースシリーズを視聴して確認した。

7月に入ってやっとテーマが上がり始めました。A班が考えたのは、「被爆ピアノ」、「安佐南区のあの日は」、そして「小学生の平和教育」の3つでした。このうち「被爆ピアノ」はこれまでマスメディアで少々取り上げられたものであり、この時点では新味に欠けるということで取り下げられ、残りの2題については提案者がそれぞれの案の魅力を主張しあいまし

た。結果、最後は「小学生の平和教育」が選ばれました。決まったのは提案者の説明の巧みさや押し出しの強さの差が大きく影響し、テーマの社会的な意味や実現可能性については議論されませんでした。一方のB班からは1点だけ提案というより、漠然とした情報が挙げられました。それは「宮島も何か戦争に関係があるみたいです」という程度のものでした。メンバーの一人が宮島で釣りをしていて、隣り合わせた年配の釣り客の話を小耳に挟んだということでした。

こうした学生たちの提案の弱点は、具体的な事実当たっていないということです。現場に足を運ぶ、人に会って話を聴くといったことはもちろん、ネット検索をかけて新聞記事などの資料を探してみることもできていませんでした。それぞれの班には以下のようなアドバイスを行いました。

(A班へのアドバイス) 2016年7月1日 メール要約

「被爆70年 小学生に伝える意味とは」。皆さんが目指す作品にタイトルを付けるとすれば、こんなものになりますか。やっと「決めた」取材目標です。全力をあげて取材していきましょう。ただ少し越えなければいけない壁があります。

- ① 最近では減っているようですが、全国の小学生が広島に修学旅行にやってきます。その時期と学校名、これまでのエピソードからヒントを探しましょう。広島市内の小学校の平和学習も同様。原爆資料館や広島市教育委員会へ直ぐにリサーチをかける必要がありませんか。
- ② 原爆資料館で小学生の団体を見かけたからといって、了解なしに直ぐに取材ができるとは思わないでください。「風景」としては撮れますが、インタビューや同行などといった深い取材は事前に理解と了解が必要です。そうしなければクレームが必ずつきます。昨今、教員はディフェンシブで官僚的です。必ず、上司（校長）ないしはその小学校を統括する教育委員会の許可が必要ということが想定さ

れます。肖像権のこともありますので、その手配も必要です。

- ③ 個人的な対象者（2～3人の小学生）を追いかけたくなるはずです。平和や原爆のことについてクラスや家庭で話す光景も撮影したい。そうなると相手側の信頼を得るために、事前に伺って丁寧にお話をして理解・協力を得る必要があります。

偶然に任せては必ず失敗します。すべて事前に関係者の理解と了解を得ることが必要です。これまでの「平和学習」に関するニュース情報を集めることも大切ですね。本格的に取材を進めていくとまだまだ超えるべき問題が出てくると思います。みなさんの足りない点は、「まだ誰にも、何にも事実当たっていない。リサーチをしていない」ということです。取材に限らず成すことすべての成功の秘訣は、「悲観的に（十分に）準備し、楽観的に（自信を持って）本番に向かう」ということです。なでしこ JAPAN のように謙虚に最善を尽くすということでもあります。みんなでその気になれば、必ずいいものができると思っています。いつでも相談してください。

このアドバイスにも関わらず、A班の事前のリサーチはこの後、全く進みませんでした。そして原爆の日の10日ほど前になって学生たちから私にリクエストがありました。それは8月6日の広島平和公園を取材するから、付き合っただけのアドバイスをしたいというものでした。私の返事は今からでも「誰を取材し、何を表現するのか」を見つけなさいというものでしたが、明確な提案はありませんでした。そこで私から学生たちに逆提案を行ったのは、通常は原爆の日をドキュメンタリー番組のフィナーレとするが、今回は8月6日から始まるドキュメンタリーを作ったらどうかということでした。70年目の原爆の日に平和公園に集う人々を見つめ、そのうちの幾人かを追っていく。それぞれの心の内に秘めた懊悩、禍根、苦しみ、そしてあるいは希望が描けないかというものです。それは被爆者自身であり、亡くなった肉親を想う家族、語り継ぐ子供たち、語り部、外国からの

訪問者が想定されます。「70年目の祈り」のその後を追い、時代状況を反映させ、時が移っても消えないものを描くという趣旨です。観念的ですが、その時点での唯一の選択肢だと思うと学生たちに告げました。

8月6日はA班5人が原爆ドーム前に朝5時半に集合し、灯籠流しが終わる夜の10時まで撮影に汗を流しました。暑い日の取材でした。しかし、河岸で原爆ドームを描く被爆画家、被爆者で幼いひ孫を連れた老婦人、線香をたいて手を合わせる幼い子供たち、多くの公衆を前に原爆被害を語る自らも被爆した経験を持つ学者、イギリスから来た国際ジャーナリスト、激しい内戦を経験したエルサルバドルの音楽家など、かなり個性的な人々から興味深いインタビューを録ることができました。原爆の日の平和公園の情景も十分に撮れたはずですが、しかしそれからの夏休み、彼らはその後の取材を始めませんでした。9月末の授業開始の時点でも同様でした。その頃A班のリーダーが経済的理由で休学を決めたこともありましたが、メンバーの意識が高まらないまま互いが様子を見合い、結局、ドキュメンタリー制作は頓挫してしまいました。その後、出遅れていたB班が取材を続け、大きな名誉にも輝いた訳ですから、A班メンバーの思いは押し知るべしです。彼らを夏休みの間も鼓舞し続け、無理やり取材させればある程度の作品はできたかもしれません。モチベーションがある時点で再び高くなった可能性もあります。A班の学生たちの動きが止まった時点でも、後期授業が始まった時点においても、筆者は彼らに強く取材継続を促しませんでした。自分で興味・関心を持って主体的に学ぶという教育目的からずれていたと考えたからです。ただ、制作を中止したことが彼らのためになったのか。筆者自身は彼らが卒業した今になっても悩んでいます。

(B班へのアドバイス) 2016年7月22日 メール要約

最初は「宮島と戦争に関係がある」という漠然とした情報でしたが、この時点では「宮島にも被爆者がいた」と少し具体性が出てきたため、テーマ設定に近づいたと言えます。しかし、まだ遠いですね。具体的に宮島と

原爆はどう関係するのか、それをしっかり調べましょう。新聞記事を調べ、市役所宮島支所や郷土資料館にあたり、街に古くからいる住民に話を聞きましょう。今では平和な佇まいの宮島ですが、当時はどうだったのか。現在も宮島に被爆者がいるのかも大切ですね。それを調べてドキュメンタリーの骨格を決めていけば、あとは宮島自体がとてもシーニックですから撮影し甲斐があると思います。兎に角、表現に値する価値を見つけ出すことが先決です。

筆者のこのメールを見る限り、8月6日の原爆の日まで2週間余りのこの時期になっても、B班はテーマを見つけ切れていないことが判ります。ドキュメンタリー制作として見ても、アクティブ・ラーニングの視点から考えても、B班のスタートは緩慢で、理想的とは言い難いものでした。しかしその後の成果は前述した通りです。

3-2-2 「忘れられた魂」取材開始からの発展と挫折

学生Bが中心になってまとめた取材記録を見ると、ドキュメンタリー制作のためにカメラ取材を行ったのが延べ11日。事前の調査、資料収集、そして取材対象者との打合せにあてた日数がおおよそ7日間。それ以外にも何日もかかった映像と音を起こす作業。時には徹夜で幾日もかけて仕上げ、それを何回もやり直した編集作業。構成し原稿を仕上げる段階。対象者に様々なお願いするために手紙を書き、お菓子を持って自宅に伺う手間。作品完成までにはこうして膨大な時間が費やされました。教員である筆者がその中で学生と共にしたのは、撮影日程のおおよそ半分で、あとは構成と原稿作成のために時間を割きました。編集は最初に打合せを十分に行った後は、時折、出来栄をチェックして助言を行う程度でした。画と音起こしは総て学生たちが行いました。あとは時折、グループ・ミーティングを行って方向性を確認したことと、取材先との思いの行き違いや著作権や肖像権といった問題を処理するために、その都度学生と話し合いを行って助言を行いました。ここでは学生たちがドキュメンタリー制作の過程で出

会った様々な課題にいかに対処してきたか、社会的存在へと成長する道を辿ろうとしたのか。検証します。

(視座の発見)

「宮島と戦争の関わり」という曖昧なテーマが、最終形である「忘れられた魂 宮島の原爆死者たち」に結びついたのが、2015年7月2日に学生たちが宮島で行った事前調査でした。廿日市市役所宮島支所の北野寿枝主事様から、原爆投下直後からたくさんの原爆被爆者が宮島に運ばれたこと。お寺に収容されて住民の看病を受けたこと等を伺いました。そして当時の目撃者の何人かを知る町の世話役の方を紹介して頂いたのです。これが今回のドキュメンタリーの真の出発点となりました。また、この世話役の方は最後まで学生たちの活動に協力して頂き、時に学生を励まし、時に厳しい評価で考察を促す。いわばメンターの役割まで果たしてくださいました。こうして学生たちはバーチャルではなく、実際に年配の人々と出会って対話ができただけでなく、その後の自信に繋がりました。

(爆発的な収穫の拡がり)

8月1日と2日。スタッフ全員と筆者とで、宮島に泊まり込んで取材を行いました。この時の取材の充実した内容が、完成した作品において重要なシーンを形成することになりました。

街の世話役をしておられる西山夫妻のお宅にお邪魔して、原爆投下当時、宮島小学校の教員をしていた新田久子さんに投下直後の学校の混乱ぶりを伺いました。また新田さんが被爆者の看護を行った光明院を訪れ、本堂に寝かされた重症患者の様子を証言して頂きました。悲惨な話を今その場にいあわせたようにリアルに語って頂きました。お寺の雑感や住職の話も撮影できました。そのほかにも新田さんの同僚だった亀井芳子さんからは、原爆が投下された瞬間の小学校で、ガラスが飛び散りすさまじい轟音が響いたことを伺いました。くわえて広島市内で被爆し大けがを負った妹さん



写真9) 宮島の街を行くスタッフ



写真10) 協力者西山夫妻を訪問

を探し出したこと。宮島につれ帰る途中に亡くなり、対岸で茶毘にふしたことを嗚咽しながら話して下さいました。お辛そうな話しぶりでした。さらに当時小学生だった佐伯弘登さんと奈良野照子さんの目撃証言を伺い、分厚い事実を集めることができました。この作品に登場する取材対象者のほとんどを、この時点で見つけ出すことができました。宮島の知られることのない歴史を、この日発掘できたと学生たちの取材記録は記しています。同時に宮島のイメージカットや捨ててカットを豊富に撮影することができました。

8月はその後も取材が続き、原爆の日の慰霊祭。さらには11日の花火大会を撮影しました。何百という原爆死者を看取った宮島でしたが、そのほとんどが身元の判らない方たちでした。そのため慰霊祭の参加者は10人も満たないという寂しい現実を、学生たちはカメラに収めました。また豪華絢爛な水上絵巻として名高い宮島の花火大会の映像は、亡くなった死者の魂の昇華を想像させるイメージカットとして、作品のオープニングとラストのシーンで彩を添えました。

(初期の反省点)

この最初の撮影素材をプレビューして確認したのは、9月も下旬に入ってからのことでした。充実した取材をうかがわせるように、インタビューもショットも豊富でした。反省点は撮影した映像が安定せず、揺れている

状態のものが多かったことと単調だったことです。構図を確認してスイッチを入れ、途中は安定させ、最後も構図を意識してスイッチをOFFにする。一つ一つの撮影場所ではシーンを作ることを意識する。すなわち場所を説明するロングがあり、状況を理解するためのミドルショットがあり、人物の想いや物の特徴をしっかりと見つめるためのアップが必ず要ること。それらがサイズ、アングル、ポジションを変えて豊富にあることで、編集を経て初めてシーンができていくわけです。早い時点でカメラマンに映像を確認させ、このことを考えさせることが必要でした。

同様にインタビュアーの質問が、相手の話をゆっくり聴く間もなくポンポンと進められていたこと。これによって話し手が自分の心と向き合い、内省を行う時間が確保されにくくなり、より深い話を録る機会を逸した可能性があります。インタビューを行う側も、相手の話を受けて直ぐには次に進まず、そこで間をおいて深掘りをしていく。それによって落ち着いて本質に迫るというリズムが生まれたはずではなかったのか。これはインタビューを行った学生の自問です。プロが何年もの経験を経て初めて判る、非常に高いレベルの技術論です。

教員として必要な反省がここにはあります。「いい取材ができた」で終わらせず、すぐにでも学生と共に映像とインタビューの確認を行う。そこで率直に批判し合う。課題を抽出する。以降の改善のポイントを確認する。つまり、そこでの反省に立って次の進歩につなげていくことで、対話的で深い学びに繋がる訳です。また往々にして学生たちの学びには、「理解できた」ということと「できる」ということにかい離が生じることがあります。こうした点を回避できるのも、この方法が有効であるし、一旦、理解した改善ポイントが次の機会に実現されれば、確乎とした自信になっていくこととなります。

こうした反省は学びにおいて重要ですが、実は初期の時点で最も大きな難関は、取材した亀井芳子さんと学生たちとの信頼関係の問題でした。8月2日、亀井さんの存在を聞きつけた取材班4人と私は直接自宅に伺い

ました。ご本人の了解を得て居間にあがり亀井さんの話を収録しました。カメラは、無残な姿で亡くなった妹さんを偲び、泣き崩れる亀井さんの顔をアップで取っていました。この時の亀井さんの話は作品の中では、最も感情がほとばしり出た感動的な場面となりました。まさに人間の葛藤に迫る、ドキュメンタリーの真骨頂とも言えるシーンです。しかしながらその日以降、学生が次の取材を入れるために亀井さんに連絡をとっても、承諾の返事は得られませんでした。そればかりか指導教員である筆者のもとに封書が届き、そこには高齢で病弱であるので、これ以上の取材は遠慮してほしいという内容が綴られていました。これについて取材記録にはこう記しています。「事前の連絡をしないまま自宅を訪問し、撮影の了解をもらったことを良いことに、一人暮らしの高齢者の狭い部屋に4人が上がり込んでの取材は、相当な負担であったに違いない」。さらに「亀井さんがどんな気持ちで当時の事を話してくれたかについて想像し、今も沈殿するその痛烈な想いに心から寄り添うことができなかった」。この一節を読んだ時の感動を筆者は忘れることができません。ドキュメンタリストとして欠くことのできない誠実さという資質を、Bくんが学んだと感じたからです。教員冥利につきます。ただこの取材記録を書き上げたのが2016年の10月でした。Bくんたちが亀井さんの取材拒否と向き合ったのは2015年の8月です。その頃はBくんも相当悩み、最悪の場合はせっかく撮影したインタビューを使えないかもしれないと考えました。そこで学生たちと筆者とで話し合いの場を持ち、彼らに解決の方法を考えさせました。妙案は浮かびませんでした。私からはとにかくご本人と会うこと。そしてとことんお話を伺い、不快に感じられたことがあるなら、誠実にお詫びしようと提案しました。その後、学生たちはお金を出し合って手土産のお菓子を買い、宮島の亀井さんのお宅を幾度も訪れました。こうした努力が通じたのか、その後亀井さんから二度「協力できなくて申し訳ない」と書かれた手紙が届き、その都度学生の労をねぎらって欲しいとジュース代として2千円が包まれていました。これ以降もBを中心に学生たちは、宮島に行くたび

に亀井さんのお宅を訪れて、健康の状態を気遣っていました。このほか、一度取材を行った方々との信頼を得るためにも、宮島を訪れるたびに少しの時間でもお会いしてお話をすべきではなかったかという一文が、取材記録に残されています。体験的な社会的学びがここにあります。

亀井さんの問題に並んでスタッフが悩んだのが2-3で述べた、カメラマンのA君の消極性の問題でした。筆者が7年間余り大学でドキュメンタリー等の映像作品の制作を教えてきた経験から、グループの中で何人かが途中から消極的になるのは、珍しいことではありません。制作の経験が無い者が経験者に気後れしてそうなる場合は、グループの中で何かの役割を持たせる必要があります。取材先や事象の背景を調査させる係をさせたり、遠くの音を正確に拾うことのできるガンマイクを持たせて撮影中は音に関することを任せたりします。しかしA君のようにカメラの担当として中心的な役割である場合は、他のメンバーの志気にも影響します。今回の場合は本人の想いが変わるのを待ち、それまでは撮影の仕事は他のメンバーが代行しました。このケースにおいてはアクティブ・ラーニングの条件である「協働」や、「学生の意欲を掻き立てる」こと、さらには「学生の思いやニーズに対応する」といった点で、筆者のA君に対するアプローチは明らかに失敗だったと言えます。このA君についてはその後2016年4月頃から始まった編集作業において、一旦、参加しようと再び意欲を見せた時期がありました。しかし、編集は最も根気と継続性が必要な作業であるにもかかわらず、最後まで自分でやり切るという気概が乏しいことは明らかでした。そこで、もともとはA班であったE君が新たに編集に加わりました。E君の技量や継続性、安定性が勝ることから、A君はセカンドチャンスもものにできないまま、最後はどうか仲間について来るといった状態でした。

(本質的な問いかけ)

指導教員として筆者が学生たちに問い続けたことの一つが、「作品は何

を描くのか」ということでした。ドキュメンタリーとは「伝える」のではなく、「描く」表現手段です。作者によって考え抜かれた社会的普遍的価値を表出する必要があるからです。学生たちは教員のこの問いかけの重要性に気づいていましたが、答えを出せないまま2016年を迎えました。そうしたある日、お世話になっている西山さんのお宅を訪ねた際に、「あなたたちはどういう作品を作るつもりなの」と、単刀直入に切り込まれたと言います。結論を出せないまま学生たちはもがいていました。そこで改めてメンバー全員を研究室に集めて議論を行ったのです。「何を訴えるのか」。学生が書いたドキュメンタリーのナレーションは、こう語ってストーリーを締めくくります。

「延命寺の裏山に埋められた、身元の判らない原爆死者たち。その後33体が発掘され、延命寺の観音像のもとに葬られました。およそ400体の残りはどうなったのでしょうか。被爆70年を過ぎ、彼らが存在したことすら、忘れられようとしています」

宮島に運ばれた被爆者たちのほとんどが亡くなったと関係者は言います。彼らはどんな人生を過ごし、どんな思いで死を迎えたのか。名前さえ残さず逝った彼らの中に、恐らく手厚く葬られた者はいないはずです。身元不明の死者として焼かれたか埋められたりしました。人間としての尊厳さえ与えられずに亡くなった方々ですが、今その死を悼む者はなく、そういった死があったことさえ知る人はわずかです。「忘れられた魂」では、彼らの死を声高に喧伝することはありません。静かに見つめて、深く考えて欲しいと見る者に促すのです。これが学生たちの到達点でした。まさに学生たちは現場に出て、人に会って鍛えられたのです。

(新事実の発見)

学生たちが取材した宮島に運ばれた被爆者のことは、彼らが調べた限り

ではほとんど資料が残されていません。しかし、学生たちの取材によって、二つの新しい事実が明らかになりました。一つは宮島に運ばれた被爆者の人数です。宮島の七ヶ寺にそれぞれ50人。合計で350人が運ばれ、そのほとんどが亡くなったという記述が、原爆戦災誌に載っています。しかし、そうした寺の一部は建物の規模が小さく、到底50人の被爆者は収容しきれないと思われるものがあります。それぞれ50人というのはかなり大雑把な資料です。こうしたなか証言者の一人から、宮島の海辺に建つ現広島経済大学のセミナーハウスには、かつては老舗旅館の別館が建っていたこと。そしてその百畳敷の大広間に、100人以上の被爆者が運び込まれていたという事実がもたらされました。そしてもう一つの事実は、宮島の対岸にある延命寺に原爆死者は運ばれ、寺の裏手の焼き場で焼かれたこと。また多くが今では保育園になっている場所や、山の斜面に埋められたということです。こうした新事実の発見も学生たちの取材の成果でした。

4. おわりに

本稿ではドキュメンタリー論から始まり、ドキュメンタリー制作を大学教育に位置付ける試みを紹介し、学生たちの作品が成し遂げたものについて考えました。さらにはそうした到達を実現するためのプラットフォームを詳細し、評価を受けた作品の制作過程における学びを振り返りました。ドキュメンタリー制作において大切なことは、あくまで具体的な事象にしがみつ়くことです。たとえ取材対象が「大状況」であったとしても、その積み重ねによって「大状況」を解き明かしていこうとするアプローチです。事実を掘り起こし、不断の抽象化の過程を経て、伝えるべき価値を表現する営みです。本稿の冒頭に紹介したように、これはスベトラーナが編み上げるルポルタージュの手法でもあります。こうしたアプローチが連続的にかつ俯瞰的になされることで、学生のドキュメンタリー制作は教育的であると言えます。能動的にマスメディアの表現方法を学ぶ、メディアリテラシーそのものでもあります。重要なことはそこでは頻繁に学生と教員によ

る考察と議論，点検と展開が行われることです。しかし，こうした過程についていけない者，怠ける者が出てきます。有名な映像祭で受賞したとしても，参加者全員が高度の達成感を味わう訳ではないのです。

現在は次の学年生がドキュメンタリーを制作しています。沖縄の怒りと焦燥に焦点を当てた、「眼差し ヒロシマから沖縄へ」。そして市営アパートに住むかつての中国残留邦人の悲哀と喜びを描く「私は日本人です 鷹一さんと二人のお婆ちゃんの場合」の2作です。やはりそこには積極的で肯定的ばかりではない，学生たちの複雑な感情や期待外れの行動があります。学生によるドキュメンタリー制作が常に学生に寄り添うアプローチであるために，教員は彼らのむき出しの感情に晒されることがあります。学生も教員に対して同様に感じているかもしれません。前年の試みによる教員の学びは何であったのか。途方に暮れることさえあります。

現在はこう考えています。不確かで見通せない社会にあって，学生がドキュメンタリーを制作する試みは，進むべき航路を見つける航海術にも似ていると。疑問を掘り下げ，人に寄り添い，考え続ける。学生にとってはスベトラナーの軌跡を自らの意志で辿る，理想的な社会的学びです。一方の教員はその学びに限りなく寄り添い続けることが役割です。つまり，学ぶ側と教える側の知が交錯し協働する教育である限り，筆者自身もまたアクティブ・ラーナーです。可能な限り，ドキュメンタリーを作ることで共に学び続けたいと考えます。学生たちの成長を願いつつ。

注

- 1) スヴェトラナー・アレクシエーヴィチ，三浦みどり訳「戦争は女の顔をしていない」執筆日誌（2016 岩波書店）
- 2) 2012年8月中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」
- 3) Youtube リンク 徳永ゼミナール作品 2016年徳永ゼミ4年「忘れられた魂 広島原爆死者たち」
- 4) 第36回「地方の時代」映像祭2016～多様性こそ地域の力～ 映像祭記録から

- 5) 新藤兼人「さくら隊散る」未来社 移動演劇隊隊長丸山定夫らの被爆した事実をもとに映画制作
- 6) 第36回「地方の時代」映像祭 グランプリ受賞作品「島の命を見つめて 豊島の看護師・うたさん」山陽放送 制作/桑田茂 演出/武田博志
- 7) 亀井芳子さん 宮島町在住 原爆投下時は宮島尋常小学校の教諭 原爆で妹さんを失う
- 8) 竹林紀雄「テレビドキュメンタリーは何を“描く”のか」立教大学
- 9) ポール・ローサー「ドキュメンタリー映画」(1976 未来社)

参 考 文 献

- 「地方の時代」映像祭実行委員会編「映像が語る『地方の時代』30年」岩波書店
相田洋「ドキュメンタリー 私の現場 記録と伝達の40年」NHK 出版
森達也「ドキュメント・森達也の『ドキュメンタリーは嘘をつく』」キネマ旬報社
土本典昭・石坂健治「ドキュメンタリーの海へ 記録映画作家土本典昭との対話」現代書館
河村雅隆「ドキュメンタリーとは何か ディレクターの仕事」ブロンズ新社
日本民間放送連盟編「時代の狩人 ドキュメンタリストの視点」MG 出版
「テレビドキュメンタリーの60年」ドキュメンタリーマガジン neoneo
柳田邦男「事実を見る眼」新潮文庫
スベトラーナ・アレクシエーヴィチ・三浦みどり訳「戦争は女の顔をしていない」岩波書店
スベトラーナ・アレクシエーヴィチ・松本妙子訳「チェルノブイリの祈り」岩波書店
スベトラーナ・アレクシエーヴィチ・三浦みどり訳「ボタン穴から見た戦争」岩波書店
教育過程研究会「アクティブ・ラーニングを考える」東洋館出版社
日本高等教育開発協会「大学生の主体的学びを促すカリキュラム・デザイン」ナカニシヤ出版
中井俊樹「シリーズ大学の教育法 アクティブラーニング」玉川大学出版部